晴れた日に

ききました、あなたはなんでも甚町あたりに住んでるときききました。
にぎやかな本通りすぢの北側、電車みちを渡るすぐと向う
草地のところどころにまだ思はぬ焼跡がのこっていて赤錆びの大砲がころがっている
甚町の、野砲隊のあと、
このごろ ぢんだん風や雨に露れはじめたバラック住宅の
迷路のような溝露路のどこかの奥に住んでるときききました。

あの八月から一年ばかり、雨の日をとくにえらんで傘にかくれ赤十字病院に通っていたのをやめてからずっと、どんなに良いお天気の日でも
どんなにお母さんがすすめても、家からいっぽ足も外へ出ないというあなた。
ちょうどあのとき B29が落きとおって ちいさな木片を散らしていたため
かた腕を山崩れた家の下でもぎとられ、頭から顔から胸を火傷を負い、一年
やっとなおってそのあとは
ケロイドの隆起が額から頸へ、てらてらと塊りつっているというあなた。それからずっと
かた腕で、夏はレース編、冬は毛糸のあみ物をしてお母さんとの生活をたてているという
あなた。

蛇のあなたに焼きつった思いのかずかずを聴き出したいという 東京かくの難詰記者をつれ
ここまで来たが、母四よりほかの人には決して会はぬときめきながら、せっかくの仲よしだったと
いう人の紹介状なら会えるはずだと此処までさがして来ましたが、
やめません。もうやめません。あなたをさがして廻るのは。
あなたの胸のかさぶたを剥きとるしみついた涙の痕を拭うことが出来ないうちは。
どうしてくらい声をあげてあなたの変った姿に眼をやることがいりません
野菜畑のゆるやかな風に風車が回り、子供たちがうまごやしの花を摘んであそぶ
このしづかな町、この町のどこかであなたはしづかに齢をとってゆきなさい。
ふくよかなるべき乳房に永久にとけぬしこりを秘めてかくれてくらす、あなたのような娘が
こうヒロシマにいくらも居るが、
あなたたちの切っても切っても盛りあがるケロイドは、
わたしたちの湧きあがる怒り
風にあてればすぐ疼きはじめるというその傷あとは
わたしたちの心に思い口をあけて塞ぐことがない。

わたしたちは このまま帰って明るい五月の道のこのしづかさをもの語り
あなたたちのかわりにも 二人分三人分の仕事を。
二人とこんな目にみんなが会うことのないように
そのためだけに働いて働いて外れるまでの仕事をしようとちかいあい
このままだまって帰りません。